

=若山牧水生誕140年・若山牧水記念文学館開館20年Memorial Year=

牧水生誕140年記念 第75回牧水祭 生誕の地に集う



晴天に恵まれ、第75回牧水祭を迎えました。牧水の命日9月17日に開催されている牧水祭。今年は三連休明けの平日開催にも関わらず、170名を超える方々にお越しいただきました。遠くは群馬県みなかみ町牧水会の方々でした。

第1部は、牧水生家横の夫婦歌碑前で歌碑祭が行われ、坪谷在住岩下富男氏による牧水の短歌朗詠に始まり、東郷学園9年生2人による献酒（写真左）、続いて主催者、若山家親族代表、来賓、団体代表、地元代表と献酒が続きました。

第2部は、ふるさとの家へ場所を移して牧水の偲ぶ会の開催です。坪谷小学校6年生2人による牧水の短歌朗詠(写真中央)に始まり、今年のメインは、創立150年を迎えた坪谷小学校児童、先生方を交えた朗読劇でした(写真右)。大人に交じっての演技は決して容易ではなかったと思いますが、一生懸命練習した成果が発揮されていたと思いました。

いかがだったでしょうか。(右資料は牧水祭パンフレットより)

その後、伊藤先生による講話、懇談会と時は流れていきました。

中庭では茶道裏千家淡交会の皆さまの野点ふるまいも行われ、暑い中ありがとうございました。

[illegible]

**牧水生誕140年記念特別企画 「①ゆかりの地めぐり」
「②記念シンポジウム」「③交流会」 開催いたしました**



【ゆかりの地めぐり】(写真 左)

9月16日(火)、参加者41名乗車。牧水ゆかりの地めぐりに出発。御銚ヶ浦歌碑(写真上)、馬ヶ背歌碑(写真中)を見学した後、美々津に残る牧水の祖母カメの実家を見学。そして、牧水生家、若山牧水記念文学館(写真下)を見学した。案内は文学館職員他、観光ボランティアガイドが行った。



【記念シンポジウム】(写真 右)

第1部 講演『牧水は今でも新しい』 講師 伊藤一彦

●昭和50年前後から新しい牧水論が論じられ始めた。

大岡 信 『若山牧水—流浪する魂の歌』

佐佐木幸綱『鳥の翼』

大悟法利雄『若山牧水伝』

●若山牧水全歌集 伊藤一彦編 若山牧水論 P540～

第2部 シンポジウム

伊藤一彦先生、歌人乃上あつこさん、歌人久永草太さんがそれぞれ引いた牧水の歌を挙げながら牧水の魅力、感性に迫った。テーマごとに迫る牧水の感受性の鋭さ、豊かさといったものに改めて気づかされた。



企画展「繁誕生」始まる

10月4日～12月28日

牧水生誕 140 年、文学館開館 20 年を記念して開催している企画展「牧水 43 年の生涯～没後 100 年の軌跡を辿る」が第 2 期を迎えました。祖父健海が坪谷の地を選び若山医院を開業するまでを追った第 1 期「日向若山家の歴史」を受け、いよいよ繁が誕生します。

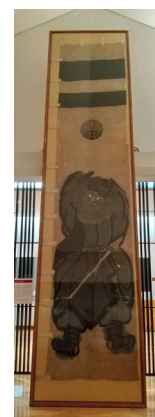
第 1 期	「日向若山家の歴史」	会期終了しました
第 2 期	「繁誕生」	10月4日～12月28日 ※月曜日は休館です。
第 3 期	「牧水誕生」	令和 8 年 3 月 6 日～ 5 月 31 日

第 2 期 「繁誕生」

坪谷で生を受け、幼少期を過ごした坪谷時代にスポットを当て、坪谷小学校卒業までの「繁」少年の姿を追います。

繁少年の誕生から成長を見届けてきた家族はもとより、「番所の阿母」^{おっかあ}「3 人の叔父」らの関わりにも注目です。普段目にできない貴重な資料も数多く展示しています。歌人牧水が坪谷の地で生を受けてから幼少期までをどうぞご堪能ください。

右写真は繁誕生を祝った節句幟で、高さ 5 メートルにもおよびます。第 1 展示室で実物をご覧ください。



文学館では、今年から没後 100 年までの 4 年間を牧水メモリアルイヤーズとしてまだまだこれからも企画立案していきます。

日向の歌姫 小田加奈子さんが 岡山県哲西町で「幾山河～」を歌う

若山牧水生誕 140 年、若山牧水記念文学館開館 20 年を記念して、5 月に当文学館で小田加奈子コンサートを開催した。詳細は文学館だより 6 月号 第 110 号をご覧ください。

コンサートを終え、小田さんの友人が、「岡山県哲西町にある牧水歌碑の前で、小田さんに『幾山河～』を歌ってもらいたい。」「牧水生誕 140 年の今年、開催することに意義がある。」と立案。

10 月 26 日（日）開催の運びとなった。

牧水は早稲田大学 4 年生の夏休み、帰省途中に中国地方に立ち寄り、この歌を詠んでいる。



けふもまた心の鉦を打ち鳴し打ち鳴しつつあくがれて行く
幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

岡山県新見市哲西町にある二本松公園には、「幾山河～」の歌碑が建てられており、この地で小田加奈子さんは「幾山河～」を歌う。

(小田加奈子さんには、前述牧水生誕 140 年記念特別企画③「交流会」アトラクションにて、「幾山河～」「坪谷慕情」を歌っていただいたことを追記しておく。)

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

秋の夜栗の話のなかにしてふとふるさとの母おもふかな

あきのよる くりのはなしの なかにして ふとふるさとの ははおもうかな

大正 2 年秋の詠草。父立蔵の急病から死去で約 10 ヶ月を故郷東郷町坪谷で過ごし、6 月末に母の許しを得て上京。小石川区大塚窪町に一戸を構え、信州から妻子を呼び寄せる。28 歳。

故郷の母マキは 65 歳。幼年のころの栗拾いや、母に連れられて山に行ったことを思い出すこともあったようだ。

わが火鉢静かに炭の火となりゆくかたへによりて栗をやくなり

は妻喜志子の歌。

(タ刊デイリー 牧水の歌 参照)